

たましいのゆくえ

—日本人の死に方と生き方の道—

2003年10月20日(月) 午後6時30分～8時30分
南山大学D棟

日本人は世界に誇るべき生き方と死に方、医療と家族関係、そして商売や自然との関係を保持してきた。但し過去数十年、日本人は物質文明を追求する余り、たましいの砂漠をさまよっている。欧米諸国と交流せざるを得ない反面、西洋流の倫理を模倣しても、消費主義が作った環境問題や医療問題の解決にも成らないし、日本の精神文化にもそぐわない。従って日本独自の歴史や道徳の中から自然の循環と人間の尊重に相応しい答えを探求する時代が来ていると確信している。また、精神面では、日本人は昔から臨死体験を記録し、大往生を人生の頂点としてきたが、末期や死を直視すると、生き方と生きる価値が倫理的に見えてくる。

講師 京都大学教授 カール・ベッカー



米国シカゴ市生れ。ハワイ大学国立イースト・ウエスト・センターより1973年に東西比較哲学の分野で修士号を得て、数年に亘ってインドや日本で研究し、1981年に同センターより博士号を取得。南イリノイ大学、大阪大学、ハワイ大学、筑波大学等の教歴を経て、現在、京都大学総合人間学部教授、国立国際日本文化研究センター評議員。日本研究の為、国際教育研究会(SIETAR)の国際理解賞を、ロンドンやボンベイの研究所より名誉博士号を受賞。文部科学省や科学技術庁等のプロジェクトに参加し、マスコミにも登場。環境を含む生命倫理、医療倫理等の研究で国際的に活躍。日本宗教学会理事、日本人体科学会理事、生命倫理学会評議員等、Near-Death StudiesやMortality誌の編集委員。著書に『死の体験』や『生と死のケアを考える』(法蔵館)、『潔く死ぬために』や『死をみつめ、今を大切に生きる』(春秋社)、『「脳死」と臓器移植』(梅原編、朝日文庫)、『死が教えてくれること』(角川書店)等多数。

後援：日本ホリスティック医学協会・日本WHO協会